



QR コード⑧ 【道しるべ⑧⇒道しるべ⑨ 440歩】

旧軽便鉄道跡道路です。直進440歩で左に道しるべ⑨が。

宇佐神宮東口まで約2.33km

軽便鉄道道路でえ～、ここも鶯がよく鳴くなあ～

宇佐参宮線跡地道路



先に宇佐参宮線について述べたが、道しるべ⑧～⑨は参宮線廃路跡道路。この道も春は鶯の囀りが響く。宇佐神宮には当時走っていた蒸気機関車「クラウド号」が展示されている。

宇佐参宮線はかつて大分県豊後高田市の豊後高田駅から日本国有鉄道（国鉄）日豊本線の宇佐駅を経て、宇佐神宮のある宇佐八幡駅までを結んでいた大分交通の鉄道路線である。元々、日豊本線から宇佐神宮へのアクセス路線として建設され（大正5年）、大分交通の経営するバス路線と競合するため廃止された（昭和40年8月）。東方面へ更に延伸し、国東線と共に国東半島一周鉄道を形成する計画もあったが、実現せず終わった。区間は豊後高田 - 宇佐八幡間 8.8km 駅数は6【ウィキペディアより】

自由律俳句作っちみらん。

「ついてくる犬よお前も宿無しか(山頭火)」

自由律俳句入門

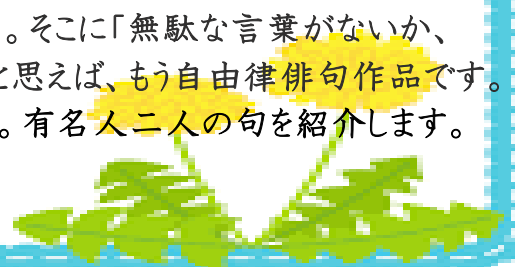
●自由律俳句（じゆうりつはいく）とは、五七五の定型 俳句 に対し、定型に縛られずに作られる俳句を言います。季題にとらわれず、感情の自由な律動（内在律・自然律などとも言われる）を表現することに重きが置かれ、文語や「や」「かな」「けり」などの切れ字を用いず、口語で作られることが多いのも特徴です。

「自由律俳句」をやってみませんか。規則がないので誰でも作れますよ。

●作り方「とにかく思いの一行をリズムカルに書いてみましょう」。そこに「無駄な言葉がないか、素直な表現であるか、を確かめましょう」。自分で「まあまあ」と思えば、もう自由律俳句作品です。

●俳句の作り方は有名人の句を真似ることからはじめましょう。有名人二人の句を紹介します。

真似ることからはじめましょう。



山頭火(さんとうか)作品24句

本名 種田正一(1882~1940)自由律

俳人として山頭火と呼ばれている。

- ・まっすぐな道でさみしい ・いつも一人で赤とんぼ ・心疲れて山が海が
- ・さてどちらへ行かう風が吹く ・窓あけて窓いっぱい春 ・さみしい風が歩かせる
- ・鴉啼いてわたしも一人 ・ころりと寝ころべば空 ・うつむいて石ころばかり
- ・ひとり山越えてまた山 ・秋風あるいてもあるいても ・笠も漏りだしたか
- ・ついてくる犬よおまえも宿無しか ・どうしやうもないわたしが歩いてある
- ・しろすがたのしぐれてゆくか ・ふる郷の小鳥啼く一木撫でてみる
- ・分け入つても分け入つても青い山 ・あの雲が落とした雨にぬれている
- ・ほろほろ酔うて木の葉ふる ・あるがまま雑草として芽を吹く ・年とれば故郷こひしいつくつくぼふし
- ・うどん供へてわたくしもいただきます ・ともかくも生かされてはみる雑草の中 ・鴉啼いてわたしも一人



尾崎放哉(おざきほうさい)作品24句

本名 尾崎 秀雄(1885~1926)種田山頭火らと並び、自由

律俳句のもっとも著名な俳人。

- ・雪は晴れたる小供等の声に日が当る ・口笛吹かるる朝の森の青さは ・咳をしても一人
- ・今日一日の終りの鐘をききつつあるく ・風吹く家のまはり花無し ・にくい顔思ひ出し石ころをける
- ・マツチの棒で耳かいて暮れてる ・鳥がだまってとんで行った ・昼の蚊たたいて古新聞よんで
- ・小さい火鉢でこの冬を越さうとする ・心をまとめる鉛筆とがらす ・ただ風ばかり吹く日の雑念
- ・こんなよい月を一人で見て寝る ・めしたべにおりるわが足音
- ・紅葉あかるく手紙よむによし ・あらしがすっかり青空にしてしまった ・
- ・破れた靴がばくばく口あけて今日も晴れる ・犬をかかへたわが肌には毛が無い
- ・入れ物がない両手で受ける ・ふところの焼芋のあたたかさである
- ・ひげがのびた顔を火鉢の上につける ・ころりと横になる今日が終つて居る
- ・山に登れば淋しい村がみんな見える ・とんぼが淋しい机にとまりに来てくれ



「自由律俳句」創始者は「荻原 井泉水(おぎわら せいせんすい)」



荻原井泉水(1884年-1976年)は、日本の自由律俳句の俳人、俳論家。「層雲」を主宰、尾崎放哉や種田山頭火らを育てた。東京市芝区神明町(現・東京都港区浜松町)で雑貨商・「新田屋」の次男として生まれる。

麻布中学の頃より俳句を作り始める。1908年(明治41年)東京帝国大学文科大学言語学科卒業。1911年(明治44年)新傾向俳句機関誌「層雲」を主宰。河東碧梧桐もこれに加わる。

1914年(大正3年)自由律俳句として層雲より創刊した初の句集『自然の扉』を刊行。1915年(大正4年)季語無用を主張し、自然のリズムを尊重した無季自由律俳句を提唱した井泉水と意見を異にした碧梧桐が層雲を去り「海紅」を主宰、袂を別つ。この頃、一高時代の同窓であり1歳年下の尾崎放哉と句会を通じて交際が始まる^[2]。種田山頭火が層雲に加わる。しかし彼らが一同に面会したことはなかった。

クイズ8

俳句の始まりは江戸時代の俳諧が基礎と言われている。
江戸時代の三大俳人3名の名を述べよ。

クイズ7の解答【(1)イ(2)カ(3)カ(4)エ(5)オ(6)ウ(7)カ(8)ア】

種田山頭火（1882年～1940年）と自由律俳句

大正～昭和にかけて活躍した種田山頭火（たねださんとうか）は、「字数」や「季題」に捉われない「自由律俳句」を代表する俳人のひとりです。波乱に満ちた57年の生涯を通じて、8万句以上もの作品を残しましたが、自由奔放で味わい深い俳句は、現代を生きる人々にも受け入れられています。

学校の教科書にも度々目にする俳人「種田山頭火」。よく山頭火とよばれています。

“どうしようもない私が歩いてゐる” “まっすぐな道でさみしい” など、堅苦しくない俳句で現代の私たちでも簡単に理解できます。むしろ、俳句ってこんなに自由でいいんだ。と思わされます。

1882年（明治15年）に山口県防府市で生まれた種田山頭火（本名：種田正一）は、自らのことを「無能無才」や「小心にして放縦」、「怠慢にして正直」と評し、その57年の生涯を「無駄に無駄を重ねたような一生だった」と振り返っています。山頭火という人物は、一体どのような人生を歩んできたのでしょうか？

種田家は村の大地主で、父親は役場の助役なども務める顔役でしたが、女性関係が派手な方で、母親はそれを苦に、山頭火が11歳の時に井戸へ身を投じ亡くなっています。俳句を始めたのは15歳の頃からで、高校を主席で卒業し早稲田大学へ進学するなど、学業の方は優秀だったそうです。大学在学中に神経症を患い故郷へ戻ることになった山頭火は、その後、大学も中退し、一家で開業した酒造場の仕事を手伝いますが、およそ10年で破産に追い込まれ、父親は消息を絶ちます。不幸続きの山頭火は、酒に溺れたようですが、俳人として頭角を現してきたのは30代頃からで、投稿した句が俳句誌に掲載されています。

34歳で熊本市に移り住み、古書店を開業しますがこれも失敗。さらには借金を苦に弟が自殺した影響もあり、この頃は空虚感や欠落感がつきまとう生活が続いたと言われています。行き詰った山頭火は、職を求めて上京するものの、40歳のときに再び神経症を患い、勤めていた図書館を退職、翌年には関東大震災により焼け出されます。熊本へ戻った山頭火は、縁あって寺男となり出家し、味取観音堂の堂守となりましたが、俳句への思いが高まり、すぐに句作の旅へと出発します。その後西日本を中心に山梨県や長野県、東北地方へも足を伸ばした旅は、亡くなる直前まで続き、その間に数々の良作を生み出したとされています。最後は松山市へ・・・そこで生涯を閉じます。

種田山頭火が得意とした「自由律俳句」とは、無駄を全て省いた「一行詩」のことで、世界最短の詩形とも言われています。ただし「一行詩」＝「自由律俳句」というわけではなく、感情の自由な律動を求め、「五七五」の定型から脱却した、俳句の一形態と位置づけられています。また「～かな」、「～けり」などの切れ字や季語、文語は用いず、口語で作られることが多いのも特徴です。

俳句は言葉の「音」や「リズム」を楽しみ、そこに美しさを見出す芸術ですが、山頭火の作品は、同じ音を繰り返し用いるなど、特にこの傾向が強く見られます。

“てふてふひらひらいらかをこえた” “春の山からころころ石ころ” “あざみ鮮やかな朝の雨あがり” “ほろほろほろびゆくわたくしの秋” “もりもり盛りあがる雲へあゆむ”

何だかラップのような趣がありますよね？そのほか、情景や感情を詩的に詠いたな作品も多く、現代のツイッターに通じるところも、今の人に受け入れられる要素かも知れません。・・・

icotto ココロみちるたび山口 「自由過ぎる俳人『種田山頭火』の名句とゆかりの地を巡る」より